

# きょう田辺棚倉孫神社で担ごう

## 子ども神輿も地元ズイキに

農福連携 **さんさん 山城が奉納**

京田辺市にある旧村の佇まい(たたくま)の棚倉(ひこ)神社(南啓史宮司)は、田辺棚倉できょう8日、子ども神輿興りやめた。

(すいぎ・みこ)担ぎが行われる。

新型コロナウイルスの影響で昨年、あるいは前年、あるいは前々年の影響で、子ども神輿は7日に出来上がり、きょう朝10時から境内で地元の子供たちが力を合わせて由緒ある神輿を担いでみせる。

隔年巡行のため、今年はないが、毎年作り続けられる子ども神輿は7日に出来上がり、きょう朝10時から境内で地元の子供たちが力を合わせて由緒ある神輿を担いでみせる。

隔年制作する神輿は重さ約380kgに及び市文化財。北野天満宮の「瑞饋」で屋根を葺き、各部の装飾には、神饌に供する新穀・青物・果物に草花を挿したもので、これを瑞饋神輿と称した。1607(慶長12)年ごろ「一を手に」と伝わる珍重物。由緒書きや記録は残らず、古くは同社所蔵の掛け軸(大正期)に絵が描かれるという。

1978(昭和53)年に瑞饋神輿保存会(現会員数317人)を結成し、その制作者の会(7人)と総代らが制作にあたって

らしや金柑、赤なすを糸で通したぶら下げ型でキラキラとした環珞(ようらく)、米・麦などの粒でできた文様はふたつとない特長を成す。

同じく煌びやかに飾り付ける子ども神輿も約100kgの重さがあるという。9月中旬に細部を完成させ、ここの2日にわたって仕上げた有志のうち、西川治(おさむ)さんは「赤なす、ススキなどの野菜集めに苦労した」と年々、傾向を強める天候不順を憂う。

天の恵みから成り立つ神輿の見栄えは今が旬。「野菜なので1週間経てば変色や枯れてくるものがある。ぜひ

ご覧にお越しくださし」と呼び掛ける。境内に昨年制作分と「並べ置き、自由に観覧」できる。

19年以降、自家製の瑞饋を寄せる障害者就業支援施設で農福連携センターの「さんさん山城」(新免修施設長)と興戸小毛詰は4年連続となる50本を利用者・職員ら約15人で持ち寄せた。

瑞饋は、大きな神輿を作る年には、ロスを減らすには、300本を見込んで約300本を栽培する青瑞饋とともに欠かせない赤瑞饋をJA・さんさん山城の両者に頼っている。

神輿は、てっぺんから瑞饋を並べていき、いもに近い部分を滑らかにカットし(ひさし)となる底部を刈り揃える。

## 地元根差した素材



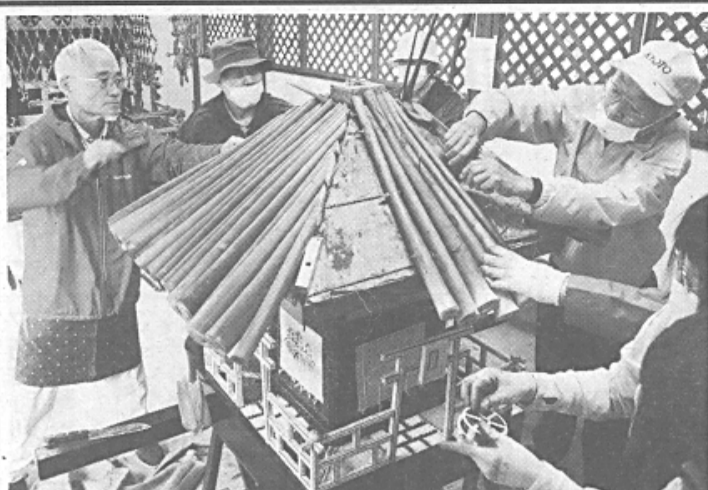
19年以降、自家製の瑞饋を寄せる障害者就業支援施設で農福連携センターの「さんさん山城」(新免修施設長)と興戸小毛詰は4年連続となる50本を利用者・職員ら約15人で持ち寄せた。

瑞饋は、大きな神輿を作る年には、ロスを減らすには、300本を見込んで約300本を栽培する青瑞饋とともに欠かせない赤瑞饋をJA・さんさん山城の両者に頼っている。

神輿は、てっぺんから瑞饋を並べていき、いもに近い部分を滑らかにカットし(ひさし)となる底部を刈り揃える。



大地の恵みをひとつずつ丁寧に施していった装飾の数々



フレッシュな瑞饋を神輿四方の屋根に葺いていく保存会制作者の有志たち

田中住研(株) 電話三〇〇〇一七

保存会の西川秀司さんとの縁がきっかけで毎年約50本を奉納するようになった。農作物の豊作を願う地元の伝統行事に関わりを続け、地域貢献を願う。今年も農業班を中心としたメンバーが足を運び、日々の作業の安全も祈願した。「地元産を増やしたい。伏見とがらしも作れないか」との要望も寄せられ、藤永実セクター長は「今年も休耕田を活用した畑で栽培。少し小振りながらもまくできた。コロナ禍も順調に事業を続けられ、様々な人や団体とのつながりも発展した」と手を合わせた。同神社では14日(金)午後7時から、4年ぶりに児童4人による舞姫奉納を含む御神楽奉納もある。